

地元杜氏の育成に対して、二つの集大成となる「常陸杜氏」の制度を設けようという提案が上がりました。そして我々、茨城県産業技術イノベーションセンターとの2年間の検討期間を経て、節目の年となる令和元年度から制度をスタートさせた次第です。

— 認証を取得するためには、どういった条件や試験がありますか？

まず、県内の酒蔵での一定の経験年数が必要となります。茨城県産業技術イノベーションセンターのセミナー「杜氏育成コース」を受講することや、「酒造技能士1級」取得者などの条件を満たすことも大前提。そして茨城県に関する一般常識

や酒造技術などを問う筆記試験、小論文、利き酒などの実技、面接といった認定試験を経て、ようやく認証を取得できるものとなります。ある程度の年数と実績、技術が必要で、センター主催のセミナーでの課題もクリアしなければなりません。至極当然ではありますが、特に利き酒の能力は杜氏の必須条件。それに関しては一定の難易度を課しています。認定試験に合格することはもちろんですが、その結果だけでなく、受験者が現場でどのような酒造りをしているか。セミナーの中に見える技能の部分も含めて、総合的に評価しています。そのような幾重にも立ちはだかる壁を突破した方々のみ、常陸杜氏として認証しているのです。



— 二〇一九年12月、その第号として、水戸市・吉久保酒造の鈴木忠幸さん、日立市・森島酒造の森嶋正郎さん、結城市・結城酒造の浦里美智子さんの3名が認証されました。

森島酒造さんに関しては先に申し上げた通り、鈴木さんが在籍している吉久保酒造は、平均年齢30歳前半の若手社員が中心となっている酒蔵で、チームワークが抜群。地元で有名な銘柄「品」を始め、全国でも話題となった鯖専用日本酒「サバシユ」などコンセプトが明確なアイデア商品も送り出していて、とにかく面白い。果たして、既存の枠にとらわれず、次はどんな手を打ち出してくるのか。若手ならではの柔軟性を存分に発揮する鈴木さんの動向は今後要チェックです。今回、紅一点となった「結ゆい」を醸す浦里さんは、希少な女性杜氏。酒造りとは無縁だった人生が酒蔵に嫁いだことよって一転し、ゼロから酒造りを学んで看板杜氏になった珍しい経歴を持ちます。酒造りとは、杜氏の人柄が正直に現れるもの。浦里さんが溢れるお酒は多くファンを呼び、結城酒造は再び盛り上がりを見せています。これらの酒蔵は常陸杜氏がいる蔵として、今後のブランドینگにも役立つと思いますし、SNS等を活用した国内外への発信、既存の取引先へのPRに活用していくのではないかと考えています。来年度以降、更に常陸杜氏が増えていけば、グループでのPR活動やイベントの開催などの取り組みも実施されていくでしょう。茨城の酒が、またつの盛り上がりを見せることに期待しています。

— 今後、茨城の酒が目指すべき未来とは？

県内39の酒蔵が、酒造業を継続していくためにも業界一丸となってチャレンジすること。これまで茨城の蔵人が代々受け継いできた伝統を守りつつ、一方で時代に合わせ進化していく。造れば売れる、という昭和の感覚ではなく、スタイルや経営を柔軟に変化させることに順応した蔵が、今後生き残るチャンスがあると思います。どのジャンルでも等しく言えることですが、個性を突き詰め、際立たせたものが強い時代。それをただ造るだけではなく、お客様に分かりやすく伝えることも重要です。例えば、日本酒はアルコール度数15、6度が一般的ですが、ワインのように二日でポト



ル一本を開けられてしまうような低アルコールの酒しか造らない。そんな風にある意味、極端なスタンズや革新も必要になってくるでしょう。昔は技術の良し悪しが顕著でしたが、今は全国的に酒造りのレベルが底上げされています。皆、一定のクオリティーを持ち合わせる群雄割拠の激しい競争が繰り広げられています。それ故に大ヒット商品が出てくるのが非常に難しい時代です。そこから、コツコツと地道に地元からファンを獲得していく努力が欠かせません。もはや隣の蔵は、ライバルではなく運命共同体。消費者を「酒育」していく活動をしながら、他の酒類と競争している意識で日本酒を広めていきたいと思っています。